

開 会 挨 拶

滋賀県琵琶湖環境科学研究センター・センター長
内藤 正明

皆様、こんにちは。ようこそ、琵琶湖環境科学研究センターへお越しいただきましてありがとうございます。第9回湖岸生態系保全・修復研究会ということで、特に本日は南湖生態系の長期変化と水草繁茂ということになっておりますが、本当にそのカーテンを開けると手の届く所に、まさに南湖生態系そのままが手に取るように見えるわけです。私も今日は隣の天津館で昼ご飯を食べたのですが、お客さん方がそこへ入って来た途端に、南湖を見て、わぁ、きれいと感嘆の声を上げていました。ここの料理の半分以上はその値打ちかなと思いますが、本当に素晴らしい景色ですね。しかし、もう少し暖かくなったら、ここ一面の水草が繁茂するわけですね。その時にはどんな景色になるかということは、よその方はご存知ないですが…。私の知る範囲でも、年々ひどくなって、西野さんによると、南湖のほとんどが水草に覆い尽くされるという時期があるということです。その原因というのは、私は、実はセンター長を仰せつかっておりながら、そういうことについては半素人ですから、本当のところよくわかりませんが、一般にこれだけ生き物が繁茂するというのは、要するに増殖する原因があって、一方では食われる原因が、それに比べて少ないというアンバランスであることは言うまでもないと思うのですが、外的要因としては、お日さんや栄養物で増殖速度が決まるのでしょうか、一方捕食圧がないということもあるようですね。そのへんのことがわかれば、私は工学屋ですから、物質収支が取れたら、モデル化できて推定できるだろうなどと考えるんですが…。生態系というのはそんな単純なものではないと、いつも西野さんに叱られています。

今日もこの機会にできるだけ勉強させていただこうと楽しみにしております。ですが、1つだけ思い出話ですが、私も20年余り環境庁の国立環境研究所で仕事をしておりました。その時に、今から20何年も前ですが、似たような状況が東京湾で、海と湖の違いはありますが、大変深刻なことが当時起こりました。あそこもやはり砂利採取で深い穴ができていた所に、何かいろんな物が溜まって、そこ

が酸欠状態になって、そこから金属が還元状態で出てきて、真っ青になった時期がありました。銅だったのでしょうか。そういうことがあって、我々の研究所もいろいろ調査し、科学研究費でもたくさんの研究者が東京湾の生態系だとか流動だとか、いろんなことを研究しました。しかし、結局いきなり何が始まったかといいますと、「もうそんなに駄目なら、東京湾にきたのはいったい何だったのだろう。当時、東京湾が土地になったりしたら、土地の値段というのは大変な時代でしたから、とんでもない資産価値ですよ。それでいいではないかと。水質だとか何だとか面倒くさいことを言っている間に、一気に土地にしてしまえというような話が起りまして、当時困った水環境局長が私に、「いったい東京湾を埋め立てたらいいんですか、いいのですか」と問われたのです。我々はもちろん駄目だ言いたいわけですね。環境庁ですから。だけど、それで何がいけないかを、論理的に主張する根拠をくださいと、こうなったわけですね。東京湾を埋め立てたらなぜいけないかという、突然そういうテーマになってしまいました。その時黒川紀章氏なんかを中心に、あの人はその後、自然共生地域開発とか都市計画とか、そんなことを大々的に売りにした建築屋さん、都市計画屋さんでしたよね。その人が東京湾を埋め立てて、そこにまちを作ったらいいと。すぐ立派な自然共生のまちを作ってやるから、汚い東京湾をおいておかなくてもいいと、こうなってしまったのです。幸い結果的にはそういうことにはならなかったのですが…。

ところで、南湖でそんな話があったことを聞きますが、今後も起こるのでしょうか。ここで先生方が一生懸命研究して、何とか水草問題を研究して、きれいな南湖を取り戻そうとやっておられて、いきなり政治判断で、あそこを埋め立てて土地にするかって。まさかもう空港はないでしょうが、この頃だったらソーラーパネルでも置いてソーラー発電でもするかといった話は、決してないことはないですね。そういうことを言われないように、研究者はいたいというふうな仕事を積み重ねていって、どうアピー

ルしていったらいいかというのは、やっぱり永久に付いて回る話かなと思ったりしています。結局、一生懸命メカニズムを解明しようとしてやっている間に、突然そういう次元のまったく違う話が降って沸くことがあり得る。従って、そのことも多少意識をしながら、そういう声が決して上がらないような成果を、要所要所で社会に訴えていかないといけない。そういう仕事も同時に、この場の先生方は担っていらっしゃるのではないかと思います。俺は趣味でやっているんだと、それはそれで趣味の場がなくなったとい

うことなのですが、この大事な南湖をきちっとした自然環境として保全したいと思ってやっている我々にとって、突然そういう話が降って沸いて、時にはそれが本当に実行されてしまうこともあるということもちょっと頭の隅に置いていただけたらというのが、私の昔の経験を踏まえた老練心というか、老練心ということです。とんでもない話で、とりあえずこれで挨拶に代えさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。